

第17号

札幌響くらぶ

発行／札幌響くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

第3回札幌響くらぶコンサート開催!!

青島流パフォーマンス連発



第3回札幌響くらぶコンサートが、5月26日土曜日の午後5時から札幌コンサートホール・キタラの大ホールで開催されました。

指揮とお話は、札幌の名曲シリーズやテレビ、ラジオでおなじみの青島広志さん。青島さん流の、明るく楽しいパフォーマンスを楽しみに来場された方も多かったと思います。期待にたがわず、独特のパフォーマンスを連発。楽員の皆さんも思わず噴き出すという、クラシックのコンサートとしては型破りとも言える明るさで、聴衆の皆さんも満足されたようでした。

しかし、ただ面白かっただけではなく、音楽そのものにも満足されたことと思います。特に今回は、前回のコンサートでのアンケートで、圧倒的な支持



を得た、ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界から」がメインでした。誰にも愛されるこの名曲が、青島流にどう料理されるのかという興味の方も多かったと思いますが、ごく正統的な演奏で、皆さん感動して聴かれたようでした。

恒例の「指揮者にチャレンジ」では、4人の方が登場。最年少の栗本賢君(札幌東豊高校1年)は、「見ていると簡単そうでしたが、実際にやってみると、拍子の取り方も分からず難しかったけど、気持ちよかった。またやってみたい。クラシックは親の影響か、大好きで、次回も是非聴きにきたい」と、満足そうでした。

アンコール「雷鳴と稲妻」の手拍子で、明るく楽しいコンサートがしめくくられました。



札幌響くらぶは札幌を愛するファンの札幌応援団です

ソリストに聞く

2001年6月26日、翌日の定期演奏会の練習を終えた吉野直子さんにお話をうかがいました。

ハープのレパートリー
創出に貢献したい!!

よしの なおこ

吉野直子さん

世界で活躍する
ハーピスト



吉野直子さんのプロフィール

ロンドン生まれ。6歳よりロサンゼルスでスーザン・マクドナルド女史のもとでハープを学び始める。1985年第9回イスラエル国際ハープ・コンクールに参加者中最年少で優勝し、国際的キャリアの第一歩を踏み出した。

これまでにベルリン・フィルをはじめとする欧米の一流オーケストラおよび日本国内の主要オーケストラ、そして内外の一流指揮者・演奏者との協演を重ねている。特に、94年、バチカンのシスティナ礼拝堂での修復記念コンサートは世界の注目を集めた。加えて、ザルツブルク音楽祭をはじめとする世界の主要音楽祭や、PMFやサイトウ・キネン・フェスティバル松本等の国内の音楽祭にも度々招かれている。

一方、レコーディング活動も活発で、これまでにソロや世界の著名演奏家との協演で、多数の録音を行っている。また、ハープの新作も数多く初演し、世界に紹介している。

85年アリオン賞、87年村松賞、88年芸術祭賞、89年モービル音楽奨励賞、91年文化庁芸術選奨文部大臣新人賞、エイボン女性芸術賞をそれぞれ受賞。

— 今日は、時間をお取り下さいましてありがとうございます。さっそくですがハーピストになられたのは、お母様の影響でしょうか。

吉野 はい、生まれる前から母のハープを聴いておりましたから。

— お母様の時代では、ハープをなさる方は珍しかったではありませんか。

吉野 母は元々ピアノをやりたいかったそうです。でも、手が小さく、特に小指が短かったのであきらめて普通の大学に進学しましたが、ハープなら小指を使わないからと勧めてくれる方がいて、卒業後、芸大に入り直してハープをやったそうです。

— 本格的に学び始めたのは…。

吉野 6歳の時に、父の仕事の都合でロサンゼルスにまいりました。母は、せっかくロスに来たのだからと、スーザン・マクドナルド先生のレッスンを受け始めまして、私も母に連れられて先生の所に行っているうち、いつの間にか習い始めていた、という感じでした。

— イスラエルのコンクールも先生の勧めでしたか。

吉野 そうですね。今はたくさんコンクールがありますが、当時はコンクール自体が少なく、自分の勉強にもなるだろうというような気持ちでまいりました。

— どんなコンクールだったのですか。

吉野 期間は2週間くらいで、1次と2次予選はエルサレムで行われます。3次予選と本選はテルアビブで行われて、ズビン・メータ指揮のイスラエル・フィルとの演奏でした。

— 優勝されて世界デビューとなったわけですが、もしハーピストになっていなかったら何になっていたと思いますか。

吉野 それはよく聞かれるのですが、あれこれ考えてみてもこれといったものがありません。やはりハープしか思い浮かばないのです。私にはきっと合っていたのでしょうね。ハープを本格的に習う前にピアノを習っていましたが、何かいまひとつしっくり来ないという感じでしたが、ハープではそんな感じはありませんでしたから。

— ところで、現在も外国での活動が多いのですか。

吉野 1年の三分の一から四分の一くらいはヨー

ロッパという感じです。アメリカは懐かしい土地という感じですが、今はヨーロッパと日本を行ったり来たりしています。

— そういう旅行が多いと思うのですが、練習はどうされるのですか。

吉野 ホテルにハーブを持ち込むわけにもいきませんし、私は割り切ることになっています。ホールで練習してホテルに戻ってきたら、そこからはリラックスする時間、と。

— 札幌には比較的多くいらっしゃっていると思いますが、どんな印象をお持ちですか。

吉野 気候も良いと思いますし、暮らす上でちょうど良い規模の街だと思います。ウィーンなんかに行きますと、仕事の合間にちょっと家に食事に帰ったり、夜オペラに行くのに着替えに戻ったりというのが当たり前前の生活ですよ、札幌もそんな生活のできる街だと思います。札幌の団員の方達も生活しやすいのではありませんか。

— 札幌とは何回くらいになりますか。

吉野 最初は14年前ですが、もう4・5回は一緒にいます。

— 今の札幌はどうですか。

吉野 ずいぶん若い方が増えましたね。今日は2回合わせましたけれど、ボワエルデューの曲を演奏される機会は多くないと思います。1回目はちょっと手探りという感じでしたが、2回目にはしっかりと曲の雰囲気を出して下さいました。

— キタラはいかがですか。

吉野 素晴らしいですね。札幌とはキタラが出来てからは初めてですが、大ホールは2年前にPMFで弾いてますし、小ホールはキタラ・カルテットで弾いています。すごく弾きやすいですし、聴いている方もとても良い音を聴いていらっしゃると思います。日本だけではなく、世界中の音楽家がほめています。うわさはすぐ広まりますので。札幌市民の皆さんが羨ましいですね。

— 演奏活動もずいぶん長くなりましたが、これまでで、特に思い出深い演奏といますと…。

吉野 ちょっと特殊なもので、もう二度とは経験出来ない、バチカンのシスティナ礼拝堂の修復記念コンサートでの演奏ですね。実は、私はミケランジェロの大ファンでして、大学の美術史でもミケランジェロを専攻しました。その「最後の審判」の下で演奏出来たのですから感激でした。もちろん、音響的には響き

過ぎで、決して良いとは言えませんでしたけれど。ご存知のように、本来楽器を鳴らしたりは出来ない場所ですから、私が、もしピアノをやっていたら決してチャンスはなかったと思います。そういう意味でもハーブで良かったと思います。ソロの他に、アカペラとの協演で、林光さんの編曲による「さくらさくら」なんかを演奏しました。

— 本当に貴重な経験をなさいましたね。

吉野 あの「最後の審判」をひとり占めにしようで、何とも言えない体験でした。

— 今は、年間に何回くらいの演奏をされているのですか。

吉野 正確に数えたことはありませんが、大体50回から60回くらいだと思います。



— 大変ですねえ。

吉野 自分としては、年間で60回は越えないようにしようと思っています。

— 最後にお聞きしたいのですが、将来に向かっての夢や希望をお聞かせ下さい。

吉野 私は、何か具体的な目標を設定して、それに向かっていくタイプではないと思います。今自分で思っていることは、ご承知のように、ハーブのレパートリーというのは他の楽器に比べると、非常に少ないですね。しかし、私は、それを逆手に取るというのか、少ないからこそ可能性が大きいと考えたいのです。将来のために、新しいハーブの曲を生み出したい。そういう作品作りに、演奏家の立場で貢献できればと常々考えています。私にとっての夢は多分そういうことだと思います。

— どうもありがとうございました。明日の演奏を楽しみにしております。

吉野 ありがとうございます。

(インタビューー 竹津宜男・佐藤良次)

楽員・会員……なごやかに交流会

札幌くらぶコンサートの直後、レストラン・キタラで恒例の交流会が開かれました。楽員の方々と、くらぶの会員合わせて100人以上が参加。グラスを傾けながら、演奏の余韻に楽しくひたりました。

ファゴットの夏山朋子さんは昨年11月入団で、初のくらぶコンサート。大阪出身らしく「お好み焼とワインが好き。これからもよろしくお願いします」と挨拶。「指揮者にチャレンジのコーナーでは、渾身の指揮ぶりに、なぜか笑いが込み上げてきて、吹けなかった」と振り返っていました。

その指揮者にチャレンジした木立憲吾さん(64)は「(客席に向いて手拍子を促した)パフォーマンスは、まず楽しさと思ってやりました。盛り上がってよかった」と満足そうでした。

演奏会自体も好評でした。会員の山田義治さんは「昨年も良かったですが、やっぱり選曲がいい。肩ひじ張らずに楽しめます」。コントラバスの斎藤正樹さんも「非常に盛り上がりましたね。来年以降もマンネリ化しないよう気を付けながら、いい演奏会にできるよう、知恵を出し合って行ければと思います」と語っていました。

最後に、トランペットの松田次史さんが「私たちは、楽器を通してみなさんの心に入っていきたいと願っています。今後とも変わらぬご支援を」と挨拶し、乾杯で締めくくりました。



一方、指揮とお話でコンサートを盛り上げてくださった青島広志さんは、次のように語っておられました。

「札幌のメンバーが“どんな風に棒を振られてもついていきます”と仰ってください、本当にやりやすい演奏会でした。一般に定期演奏会以外は軽く考えるオーケストラが多い中で、レベルの高い演奏をしたのは団員の心構えのほか、キタラの力もある。良く聞こえるホールというのは、変な演奏をすると、それが目立ってしまうものです。

札幌のコンサートに来ていつも思うのは、聴衆の雰囲気がいいこと。今後は、サロンコンサートなんかも増えればいいですね。20人くらいまでの編成でね。そうすれば札幌の別の魅力も出てくると思うんです。もう一つ、くらぶコンサートには高校生までも多く来られることですし、交響曲はどう作られているか、楽器の特徴は…なんかを、もう少し説明したかった。曲を減らして、そういう場面をつくってもいいかもしれません。」

(宮本 武)



札幌物語 XVII

式典での演奏 2



札幌交響楽団は様々な式典の中で演奏を行っています。その中のいくつかは札幌にとって歴史的に意義のある場面になります。

札幌誕生の公式的ないきさつは既に数多く語られています。それによると、昭和34年8月に札幌市文化会議が札幌市民交響楽団の設立を議題に取り上げ、札幌を作る気運が高まってきたところから始まるのです。

あまり知られていませんが、時を同じくして札幌市とポートランド・オレゴンとの姉妹都市提携がにわかに関わり、それが札幌発足に勢いをつける大きな要因になったそうです。

昭和34年に、外務省アメリカ局とポートランドの日系人会長からの姉妹都市縁組の要請が札幌市に対して行われました。11月4日から大阪で開催された日米市長・商工会議所会頭会議に来日したポートランドのシュランク市長と、当時の故原田與作札幌市長が大阪で面会しました。すっかり意気投合し、話はとんとん拍子に進みました。シュランク市長は11月17日に来札し、姉妹都市提携盟約書に調印、姉妹都市縁組は成立したのでした。

両市の間では、その後ロータリー・クラブや学校同士の姉妹関係が進み、翌35年6月、当時の中島好雄札幌市教育長が札幌市の公式代表としてポートランドを訪れ、世界的に有名なポートランドのバラ祭に、藻岩山と札幌神社をデザインした花車に乗ってパレードに参加しました。

公式スケジュールの中にはポートランド・ジュニア・シンフォニーの演奏会もありました。このオーケストラは全米一を誇るアマチュア・オーケストラです。それを聴いた中島教育長は感動したそうです。演奏終了後、シュランク市長から「次はお宅のオーケストラを聴かせ

てください」と言われ、帰札後いささか慌てることになってますが「承知しました」と返事したと市長に報告したそうです。

これを契機に、オーケストラを作る話にはわかに進展することになりました。その年12月、札幌市民交響楽団設立世話人会が発足、6月24日、市議会総務委員会で楽団への運営助成請願を採択、7月1日には、札幌市民交響楽団が発足しました。札幌は、札幌市民交響楽団として順調に船出し、翌年、財団法人札幌交響楽団になりました。

ポートランド市と札幌市との約束は、創立の翌年昭和37年4月15日、札幌市民会館で行われたシュランク・ポートランド市長歓迎セレモニーでの演奏で果たされました。札幌は故荒谷正雄初代常任指揮者の下で、日米両国歌、コープランドの「アパラチアの春」や「春の海」などを演奏しました。

その2年後、39年には「ホテル三愛」（現在のパーク・ホテル）の「マリモの間」で行われたオレゴン州知事一行歓迎レセプションで、故荒谷正雄指揮でドビュシーの「小組曲」ほかを演奏しました。この演奏には、お褒めの言葉をいただきました。

その後、成長を続けた札幌は、昭和50年、初めての海外公演でポートランド・オレゴンを訪問し、故ペーター・シュバルツ指揮でベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」ほかを演奏し、絶賛を博しました。

札幌にとって、創立の翌年に札幌市民会館で行われた、ポートランド市長歓迎セレモニーでの演奏は、札幌のオーケストラで初めて要人をもてなした記念すべき式典での演奏だったのです。

(竹津宜男)

趣味は…

豊彦 晩酌と温泉めぐりということになっていますが(笑)…趣味っていう趣味じゃないんですけどね。まあ、お酒はだいたい毎晩のペースで、何でも飲みます。カクテル作りも好きです。温泉はひなびたところ…犬がいたり、面白いオバちゃんがいたりする温泉とか(笑)。

愛彦 菅野温泉ね、泊まりに行ったら大きな白い犬が荷物くわえて運んでくれて。犬があんまりカワイイカットなので、部屋に案内してくれるお姉さんに「あの、名前は？」と聞いたところ、お姉さんが「え、私の名前ですか？」と言ったので、「違います。犬の名前…」と言って、その場がシラケタ…(笑)。あと、趣味はパソコンとか。

好きな食べ物って？

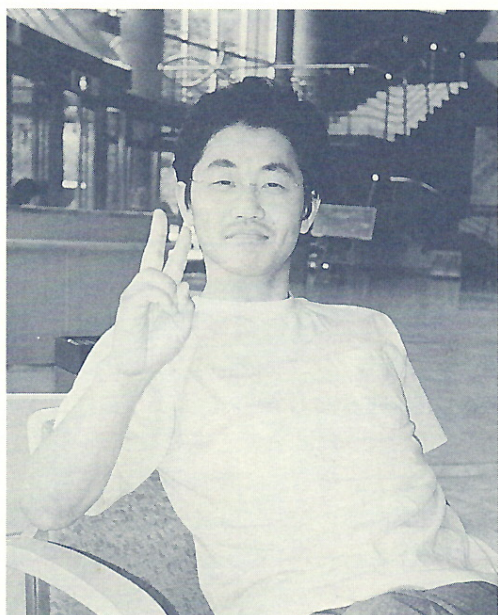
愛彦 ふつうの醤油ラーメン。ラーメンの話し始めたら尽きることないですね。

豊彦 自分で美味しい店を探して。
あと、こっちは寿司が安くて美味しい。主に回転寿司だけど、ほんとに頻繁に食べますね。

行ってみたい場所ってありますか？

豊彦 プライベートで行ってみたい所は、ニューヨークかな。街を見てみたい。イタリアもいいですね。札幌に入ってから、一年ほどドイツに留学していて、その頃行ってみて「いいな」と思いました。

愛彦 タイとか…。



三原豊彦さん



三原愛彦さん

くらぶコンサートについては…

愛彦 面白かったですね。ああいう指揮者コーナーっていいですよ。プログラムも、くらぶの人からもどんだしてもらって、話し合っていきたいですね。

豊彦 曲の解説だけでなく、もっとトーク増やしたり、いろんな角度からやってもおもしろいかも。団員に指揮させるとか。

札幌くらぶについて

豊彦 ファンクラブのあるオケってあまりないですから。ありがたいですね。

愛彦 くらぶでホームページも作ればおもしろいと思いますよ。

ちょっと宣伝

豊彦 来年の3月「ちえりあ」で、アマオケの演奏会で、モーツァルトの二重協奏曲を二人でやります。

愛彦 ぜひ聴きに来て下さい。

さすがに双子の兄弟だけあって、お二人の答えの間合い等に、巧まぬ絶妙のリズムがあり、すっかり感心させられました。

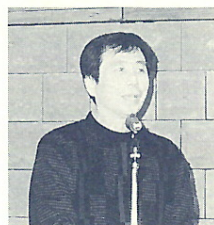
芸術の森での練習の合間、あっという間に時間がたったような気がしました。

なお、お名前を敬称なしで使わせていただきました。

(インタビュアー 西野留理子・鎌田清美)

from 「札幌くらぶ」

円光寺さんのお別れ会開催



1998年5月から、常任指揮者尾高忠明氏とコンビを組み、札幌交響楽団正指揮者に就任した円光寺雅彦氏が、この4月末日をもって退任されました。

3年間の在任中、道内各地のコンサートに登場し、尾高氏と並ぶ札幌の顔として活躍されました。

正指揮者として最後のステージとなった4月20日の第434回定期演奏会終了後、レストラン・キタラで楽員とのお別れ会が行われ、札幌

くらぶのスタッフも10名程度参加しました。

挨拶に立った円光寺氏は「事務局から慰留をいただきましたが、当分の間フリーな立場で勉強してみたいという思いが強く、退任させていただくことになりました。この3年間、道内各地を回り、特に第九をやる機会が多く、地元の合唱団と協演したり、どのコンサートも思い出深いものばかりです。今後も、機会を与えていただければ、札幌と是非一緒したいと思っています。」と述べられ、楽員から心のこもった拍手を受けていました。

お別れ会はこの後、札幌くらぶ事務局長の上田文雄氏の音頭で乾杯、円光寺氏と楽員が別れを惜しんでグラスを傾けながら話す風景があちこちで見られ、札幌くらぶスタッフも心から今後の氏の活躍を祈って激励し、記念撮影もしました。

我々ファンとしても、残念な気がしますが、ご本人の意志を尊重し、いつの日か今以上に大きく成長されて札幌に戻って下さることを期待したいと思います。



「オーロラタウン・コンサート」開催

3月から札幌による新たな試み「オーロラタウン・コンサート」が行われています。新聞・テレビ等でご覧になったり、実際にオーロラタウンに足を運んだ方も多と思います。

このコンサートの趣旨は、札幌の挨拶文に次のように述べられています。「この(40周年の)節目の年を契機とし、皆様

にこれまでの感謝を込め、また、一層『札幌』をご支援いただくために、この度、さっぽろ地下街オーロラタウンにて

“オーロラタウン・コンサート”を定例的に開催させていただくことになりました。」(一部を抜粋)

これまでに3月～7月の5回が終了し、各回少人数のアンサンブルで熱演する楽員の熱気もあって、毎回多くの聴衆が集まって、午後一時ふと足を止めて音楽を楽しんでいます。

札幌くらぶも、このコンサートの趣旨に賛同し、毎回スタッフが手分けしてプログラムの配付等のお手伝いをしています。



編集後記

今号は、「札幌くらぶコンサート」の報告のため、「FAN CLABの和」は休ませていただきました。ご了承下さい。次号では山形交響楽団のファンクラブを紹介の予定ですが、ほとんどのプロオーケストラにはファンクラブはないようで、その後はしばらく休載になるかもしれません。ファンクラブの存在をご存知の方情報をお

寄せ下さい。

英国公演も約3か月後になりました。「同行ツアー」も企画され、会報と共にご案内も届くことと思います。奮ってご参加下さい。

次号は出発直前の発行ですが、英国公演の詳細な日程などをお知らせできると思います。楽しみにお待ちしております。(佐藤良次)